

遼寧省鳳城・岫巖のバルガ人

柳 澤 明

はじめに

1. 文献からみる鳳城・岫巖のバルガ人の変遷
2. 調査の背景と日程
3. 調査で得られた情報

おわりに

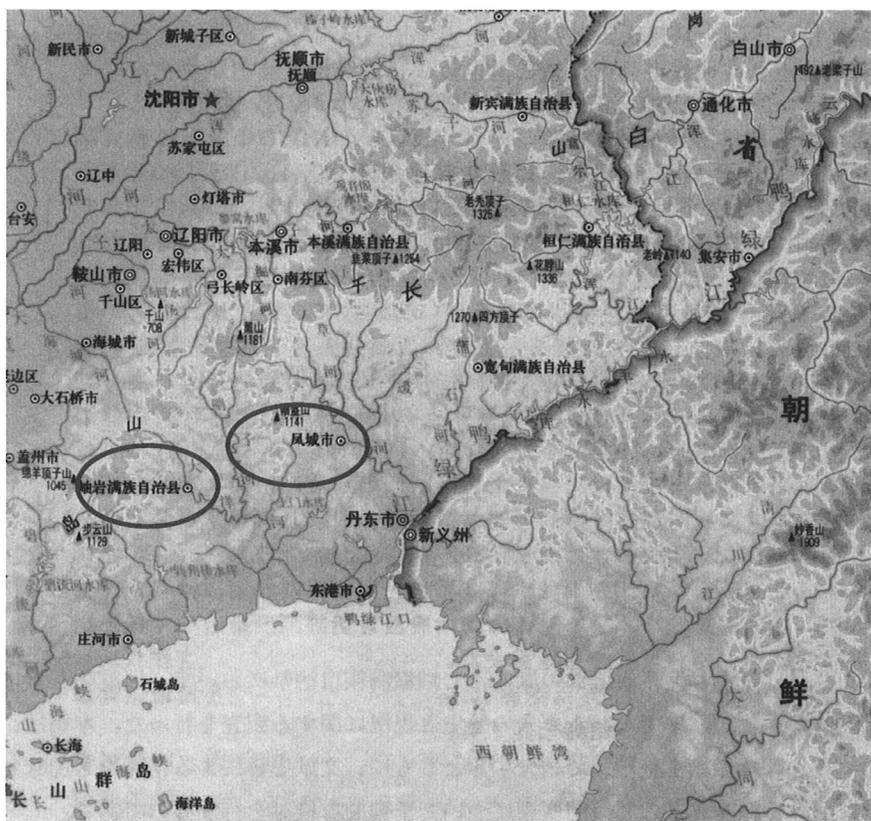
はじめに

2005年9月、筆者は遼寧省南部の鳳城市と岫巖満族自治県において、旧駐防八旗に由来するモンゴル系住民、中でもバルガ人の歴史と現況に関する調査を行った。本稿は、調査を通じて得られた知見を整理して紹介するとともに、文献史料による情報をも加味して、同地域におけるバルガ人の歴史の変遷について予備的な検討を行うものである。

中国東北（満洲）では、16世紀末～17世紀初めの後金建国期以来、ほぼ20世紀半ばに至るまでの間に、大規模な人口移動が数次にわたって生起し、諸民族集団の区分や分布、域内各地の住民構成・社会環境を根底から作り変えた。従って、各集団の社会・文化変容の過程を総体的に把握することは、たとえ地域を狭く極限したとしても、変数があまりに多く、容易なわざではない。まず、多くの集団については、そもそも彼らの祖先がいつどのような経緯で現住地に定着したか、という出発点が必ずしも分明でないことが、大きな障害である。さらに、「民族」の呼称や切り分け自体も時として変化するため、記述対象の範囲をどのように設定すべきかさえ、明確には定めがたい場合が多い。

今回、バルガという集団に着目したのは、鳳城・岫巖一帯に移住した時期、当時の人口規模、行政上の位置づけ等を文献史料から確実に知りうる——つまり「初期設定」がはっきりしている——こと、また民族呼称が八旗制のもとで安定的に使用されたことから、一種のマーカーとして有用と思われるからである。すなわち、まず由来が明らかで識別が比較的容易な特定集団に焦点を絞って検討し、そこで得られた知見を他の諸集団に応用する可能性を探りたいと考えているわけである。

ただし、文献からたどりうるバルガ人の歴史は、上述した「初期設定」の部分を除けば、ごく断片的なものに過ぎない。一方、聞き取りや家譜・墓碑等から得られる情報は、とく



鳳城・岫巖位置関係図(『遼寧省地図冊』中国地図出版社、2004年による)

に古い時代に関しては、あくまで人々の歴史認識の反映であって、史実とは必ずしも一致しないし、かつしばしば自己矛盾を内包している。今回の調査で得たデータも、量的なおお不十分である上に、そうした問題を少なからず抱えており、適切に取捨選択して整合的な解釈を引き出すことは、かなりの困難を伴う。

従って、本稿の究極の目標は、バルガ人という特定集団の比較的長期にわたる変容過程の全面的な再構成あるとはいうものの、現段階では、ただちにそこに到達することは望みえない。ただ、文献による史実と現地に残された歴史の痕跡とをいかに組み合わせようべきか、あるいはそもそも組み合わせようとすることに意味があるのか、といった方法論上の命題への答えを模索する試みとしては、何がしかの意義を有すると思われる。

1. 文献からみる鳳城・岫巖のバルガ人の変遷

1-1. 駐防八旗の設立

鳳凰城¹駐防の設立について、『盛京通志』(130巻本、乾隆49年以降成書)巻51は、崇徳3(1638)年に通遠堡から城守尉を移設したとし、民国『鳳城県志』もこれを踏襲する。

しかし、乾隆『大清会典則例』（乾隆28年成書）巻102および巻174によれば、まず順治17（1660）年に防禦3員、満洲・蒙古・漢軍兵150名を置き、次いで康熙26（1687）年に城守尉を設け、防禦5員と兵650名を増設したという。おそらく後者によるべきであろう。ちなみに、城守尉の設置については『八旗通志初集』（乾隆4年成書）も康熙26年とする。一方、岫巖駐防の設立については、諸史料はおおむね一致して、康熙26年に城守尉1員、防禦8員、満洲・蒙古・漢軍兵1,000名が置かれたことを伝える。康熙26年前後は、清朝がアムール方面でのロシアとの対決に伴って、東北一円での兵力再配置を進めていた時期にあたり、両城駐防の整備もそうした動きの一環と見るべきであろう。

1-2. バルガ人の移住

バルガ人が盛京一帯に到来するまでの経緯については、別稿で詳論したことがあるので、ごく概略の説明に止めておきたい。バルガ（モンゴル語 *Barγu*、満洲語 *Barhū*）と呼ばれる人々は、元来はオノン河・シルカ河流域からフルンボイル一帯に居住し、ハルハのチェチェン＝ハン部の諸侯に分属していた。しかし、1688年にジュンガルのガルダンがハルハに進攻すると、彼らは四散し、一部は翌康熙29（1690）年に黒龍江將軍管下の嫩江流域に流入して、在地のソロン人やダグル人となし紛争を引き起こした。こうした状況を受けて清朝は種々の対策を講ずるが、最終的には彼らの大部分を盛京・吉林に移住させることに決する。なお、康熙33（1694）年には、バルガ人の別の一群が清朝に収容され、チチハル駐防八旗とブトハ八旗に分属したが、後者は雍正10（1732）年にフルンボイルに移駐し、現在の陳巴爾虎（ホーチン＝バルガ）旗の住民の基礎となった。また、ハルハに残留したバルガ人の一部も、雍正12（1734）年にフルンボイルで八旗に編成された。現在の新巴爾虎（シネ＝バルガ）左右両旗の起源である。他に、チャハル八旗に組み込まれたバルガ人もいる²。

バルガ人の盛京・吉林への移住に話を戻すと、康熙30年、黒龍江將軍サブス（*Sabsu*）は、嫩江に流入したバルガ人のうち、もと *Dalai jinong* に属していた *Ongkot* 姓の900丁を6ニルに、*Honggor daicing* の所属であった2,100丁を14ニルに編成することを提議した³。後者の氏族構成は明確ではないが、断片的な情報を総合すると、*Togongkon*、*Ulanggot*、*Odor* 等の氏族の他に、バルガではないハルハ人も含まれていたらしい。この時点では、まだ彼らの最終的な処遇は未確定であったが、その後検討が重ねられた結果、盛京各城と吉林の駐防八旗に組み込むという決定がなされた。移駐は康熙31年7月頃に始まり、バルガ人たちは、水陸両路で何隊かに分かれて移動した。盛京に向かったのは1,270丁5,023口、吉林に向かったのは1,893丁5,955口という⁴。

盛京一帯に到着した後の状況については、周寿昌『思益堂日札』『巴爾虎事輯』条にまとまった記述がある⁵。同条に引用されている康熙31年9月20日付の兵部の上奏によれば、盛京將軍は、受領した「カ勒カ巴爾虎」の5,000余口1,273丁について、100丁を1ニルとし

て10ニルを編成し、各ニルの領催・兵は55名とし、盛京周辺には牧場がないので、暫時遼陽以西、太子河に沿って黄泥窪・牛莊までの間で牧畜させ、冬季には家屋を支給するという計画を策定した。兵部はこれに対し、ニル編成等については原案通り実施するほか、10ニルの配置は開原・遼陽・熊岳・復州・金州・岫巖・鳳凰城に各1ニル、盛京に3ニルとし、彼らに3年の間農耕を教える間は公務を課さず、農具・種籽・食糧等を支給するという措置を追加した。また、洪闊爾代清(= Honggor daicing)の子塔汪札布等が独立のニルに編成してほしいと訴えた件について、これを認めることもあわせて提議した。以上の兵部の上奏に対して、9月23日に「依議」との旨が下ったという。

1-3. その後のバルガ=ニル

上記の諸史料から、康熙31(1692)年に鳳凰城と岫巖に各1ニルが駐防したことは明らかである。『八旗通志初集』、『大清会典則例』、『欽定八旗通志』(乾隆51年奉勅撰、嘉慶年間成書)、『国朝建業初基紀略』(光緒年間成書)等の諸史料によれば、その後しばしば官員・兵丁の増減はあったものの、両城の駐防旗制の枠組みは清末に至るまで基本的に変わらず、バルガ=ニルもそのまま存続した。

ただし、バルガ=ニルには、後に他の民族成分が加わったようである。雍正9(1731)年の黒龍江将軍の上奏には、西モンゴル方面であらたに収容したウリヤンハイ(Uriyanghai)1ニルの62戸176人を、盛京のほか、バルガ=ニルのある遼陽・熊岳・復州・岫巖・金州・鳳凰城の6城に移し、壮丁を適宜披甲に採用して錢糧を支給する、との記載がある⁶。史料から検索し得てはいないが、この一回だけではなく、他にも類似のできごとがあったかもしれない。

嘉慶・道光年間、すなわち19世紀前半のバルガ旗人の状況に関して、「巴爾虎事輯」には興味深い記事がある。まず、嘉慶19(1814)年には、鳳凰城のバルガの兵である昱昇という者が初めて武科挙を受験したが、文科挙に応ずる者はまだなかった。ついで道光19(1839)年、閑散慶魁という者が蒙古損監生として官途につこうとしたとき、盛京兵部は、バルガが蒙古の名をかたって捐納することを認めるべきではないと判定した。これに対して、盛京将軍は次のように反駁したという。

查するに、……今巴爾虎は世管佐領⁷三缺を額有し、並びに協領及び副都統に薦陞する者有りて、自ずから八旗と事同じく一体なり。況や巴爾虎は地名に係属し、実に正身の蒙古に係る。……而して巴爾虎佐領下の慶魁・福良阿等、実に佐領有るの正身旗人に係り、蒙古と一体に差に当たる。応に捐納すべきや否やの処、咨覆し査核して辦理せん。

この提議は裁可され、バルガ人は捐納について一般旗人と同様に扱われることになった。一方、これに先立つ道光16(1836)年、盛京将軍はバルガ人の現状に関して次のような上

奏を行っていた。

如し蒙古協領の員缺出有するに遇えば、間ま内外城の蒙古・巴爾虎佐領より公同に揀選し、佐領・防禦・驍騎校等の官に至りては、蒙古・巴爾虎各おの各缺に選ぶこと、^し歴しは辦理を経て案に在り。惟だ近数十年來、巴爾虎の戸口甚だしくは繁滋せず。該佐領下の馬甲の缺出づるに遇う毎に、^き尙に^{ことごと}皆く滿洲・蒙古旗分の閑散を借用して挑補し、其の一切の陞放は仍お本旗に歸して辦理せしむ。現在巴爾虎佐領下に借補する者を合計すれば已に十に七八を居む。……伏して思うに、蒙古協領の一缺、既に蒙古・巴爾虎佐領の一体に陞授するを准す。有る所の蒙古・巴爾虎の佐領・驍騎校の各缺も応に公同に挑選し、以て画一に歸せしむべきに似たり。

つまり、バルガの人口が増えないため、馬甲（兵）の缺が生じてもバルガ人で補うことができず、滿洲・蒙古旗人を仮に充てることがすでに7～8割を占めているので、今後は佐領・驍騎校等の缺も一般の蒙古とバルガに分けるのを止めて、一体として人事異動を行いたいというのである。この上奏は裁可されたが⁸、同時に、バルガの子弟をよく訓練して人材を育成し、バルガ馬甲の缺を補う際にはなるべくバルガ人を優先し、みだりに蒙古・滿洲旗人を充てないようにすべきとの注文がつけられた。以上の一連の史料から、当時八旗組織の中でバルガの独自性が弱まり、蒙古・滿洲旗分との区分が曖昧になりつつあった状況が看取される。

1-4. 民官設置と民人の増加

鳳凰城・岫巖一帯に民官が設置されたのは、乾隆朝後半のことである。『盛京通志』、咸豐『岫巖志略』、『国朝建業初基紀略』等によれば、それまで一帯の民人は蓋州に兼轄されていたが、乾隆37（1772）年、岫巖庁を設けて理事通判1員を置き、復州・海城・蓋平・寧海の民戸の一部を分けて管轄させた。次いで乾隆41（1776）年、岫巖理事通判に鳳凰城の事務を兼管させるとともに、鳳凰城に巡檢司を置いた。光緒2（1876）年には、鳳凰城を鳳凰直隸庁と改めてその下に安東・寛甸の2県を設け、翌年には岫巖を州に改めて鳳凰庁に隸属させた。以上の一連の経緯を見ると、乾隆期には岫巖の方が民治上重要な位置を占め、鳳凰城はそれに付随する扱いであったものが、清末には逆転したことがわかる。こうした趨勢は、人口にも表れている。『盛京通志』には、乾隆37年の「新編民戸」として4,310戸、男婦19,311口という数が挙げられている。これは岫巖・鳳凰城の両者を合わせたものであろう。一方、『岫巖志略』、『国朝建業初基紀略』によれば、丁銀徴収の対象となる額丁数は3,821であるが、内訳は鳳凰276、岫巖3,546である（1丁のずれは史料間の食い違いによる）。これらの数字から、ほぼ当時の両地の民人人口の比率を推し量ることができる。これに対して、民国10（1921）年刊『鳳城県志』の引く光緒33（1907）年の戸口数は34,212戸、男婦大小241,205口（おそらく旗人を含まない）⁹、民国17（1928）年刊『岫巖

県志』の引く同じ光緒33年の戸口数は24,381戸、男女170,738口（旗人等を含む。うち漢人は16,682戸、男女117,519口）である。史料の制約から厳密な比較は難しいが、大まかな傾向として、鳳凰城の方が人口の増大、つまり民人の流入が著しいことが見て取れよう。なお、民国元（1912）年に鳳凰庁は鳳凰県に改められ（同3年に鳳城県と改名）、翌年岫巖州は岫巖県となり、同時に、もと海防撫民同知が置かれていた南の海岸地帯は莊河県となった。『岫巖県志』によれば、岫巖城守尉の官庁は民国8（1919）年に裁撤され、関防は県署に移管されたという。

1-5. 民国『鳳城県志』、『岫巖県志』の記載

民国『鳳城県志』第9巻「人物志 氏族」には、「巴爾虎蒙古」の条がある。近年の諸文献の記述の基になっていると考えられるので、全文を引用しておこう。

悉く喀爾卡人なり。是より先、準^{ジュンガール}噶爾其の全部を呑まんと欲す。内の一小部、巴爾虎と曰う。準酋之を軽んじ、子を遣わして降を説く。部長勢の敵せざるを知るも、又附従するを恥とす。遂に其の使を殺し、男婦万余人を統べ、牛羊を駆りて南下し、張家口外に遊牧す。時に康熙三十一年、王大^キ臣議奏すらく、「巴爾虎人等、能く奮勇報国す。請うらくは盛京等の処に撥して甲を披せ糧を喫わしめんことを」と。旨を奉じて議の如くし、移り来たるもの一千二百余人、百人毎に一佐領を編し、開原・遼陽・熊岳・復州・金州・岫巖及び鳳凰城の七処に分駐せしむ。本城の旗籍に入る者、独り署を立つると雖も、実は正黄に附属す。今県南の蒙古營子は即ち当時族聚する処なり。人は最も精明、語原爽慨にして文学を重んずるも、多年未だ致に入るを得ず。後に岫巖の寇氏を推して出首せしめて満号に併入するを准されんことを請う。陳蒙古等と与に洋に遊ぶ者有り。

その後、バルガの氏族名が次のように列挙されている。

馬卡氏 世よ西紅旗に居す；謝京氏 世よ林子溝に居す；陶国渾氏；何西勒氏 世よ樓房溝に居す；吳西勒氏 亦た敖奇勒と曰う。皆く蒙語より衍出し、其の後第一字を以て姓と為し、故に吳と敖は同族たり；穆奇德氏 即ち秦氏、世よ城西の葛藤峪に居す；包爾機根氏 世よ紅旗街河南の包家營子等の処に居す、三戸有り、同姓異宗なり；梅林其德氏 世よ西紅旗に居す；沙土魯氏 世よ二道洋河に居す；吳力洋漢氏 世よ西楊木溝に居す；按ずるに巴爾虎蒙古共に十一姓、今止に十姓^{わづか}を載せ、其の一は考を失う。

なお、バルガ以外の蒙古旗人については、「翁牛特」と「鄂爾多斯科」の両部に属し、鄂・陳・康・蘇・戴・ト・白・瓜爾佳・常・巴・謝・韓・何・吳・石・艾・張・王・李・馬・胡爾佳の諸姓があるという。同書には、他に第2巻「職官志 城守尉」に「九旗」条があり、駐防旗制の概略を記すが、バルガの添設を康熙25年と誤っている。ただ、巴爾虎旗

署が「今の県公署の後」にあったというのは有用な情報である。

一方、民国『岫巖県志』には、バルガに関する記述は皆無に等しい。巻3「人事志」には「民族」、「民種」等の条があるが、バルガへの言及はないし、「氏族」の条にも、バルガと見られる氏族は挙げられていない。わずかに、巻2「政治志」の「城守尉官庁」条に「巴爾虎旗」に関するごく簡略な記載があるのと、巻4「人物志」に、金州の佐領から本城のバルガ佐領に転じた寇連興という人物の名が見える程度である。なお、3-2-1で後述するように、岫巖駐防のバルガ人の大部分は、現在の莊河市の領域に住んでいたと推定されるが、民国10（1921）年刊『莊河県志』にも、バルガに関する記載は見えない。

1-6. 近年の民族構成とバルガ人に関する情報

『鳳城市志』（1997）に転載されている1990年人口センサスの結果によれば、鳳城満族自治県（当時）の総人口は599,540人、うち少数民族は463,551人（総人口の77.65%）で、少数民族の内訳は、満族428,617人、蒙古族21,986人、錫伯族4,577人、回族4,487人、朝鮮族3,740人等である¹⁰。バルガ人は独自の民族ではないので、数字には表れていない。今回の調査時に民族宗教局で聞いた数字では、全市総人口57万人、うち満族41万、蒙古族1.9万で、蒙古族の約1/4がバルガ人であるという。『鳳城市志』には、市内の蒙古族（バルガ人を含む）の姓氏に関する一連の記載があるが、ほとんど民国『鳳城県志』からの引き写しである。ただ、バルガ人の居住地域については、旧鳳城県三区（龍王廟以南、現在は東港市に所属）と六区（紅旗、玉龍、藍旗の各鎮と東港市合隆鎮）に多く住んでいるとする¹¹。

岫巖については、今回の調査では人口データを得られなかった。やや古いが、『岫巖県志』（1989）所載の1984年の数字によれば、総人口は474,896人で、うち満族340,727、漢族129,457、蒙古族2,772人、回族1,754人である。『岫巖県志』は、県内の蒙古族について、大部分が蒙古八旗とバルガ旗の後裔で、蒙古八旗は、鳳城と同じく「鄂爾多斯科」と「翁牛特」の両部に分かれ、朝陽郷馬路溝鄂家堡子の鄂姓は前者で「陳蒙古」と称し、他に前営郷の張姓（もと「治良匡」氏）、哈達碑の李姓（もと「李雅拉」氏）等があるとする。バルガ人については、寇姓（もと「翁闊特」氏）のほか、朝陽郷の秦姓があるというが、総じて記述はごく簡略である¹²。

2. 調査の背景と日程

今回、鳳城と岫巖を調査地として選定したきっかけは、ブレンサイン氏が2004年に鳳城で旧蒙古旗人の調査を行った際、同地に「バルガ人」が現存することを確認し、『吳西勒氏譜書』を実見されたことにある¹³。かねて清代におけるバルガ人の移動と再編に関心を抱いていた筆者は、ブレンサイン氏からこの消息を聞いて、共同での再調査を希望したところ、冒頭に記したとおり、2005年9月に実現の運びとなった次第である。岫巖に関して

は、実は現地に行くまでバルガ人に関する具体的な情報はなく、文献上はいるはずだからとにかく行ってみようということに過ぎなかったのだが、結果としては首尾よく聞き取りを行うことができた。調査が比較的順調に進んだのは、ブレンサイン氏による現地関係者との緊密なコンタクトに負うところが大きい。あらためて謝意を表しておきたい。

調査方法は、短期間だったこともあり、ごく簡単なもので、現地の民族宗教局や地方志辦公室の関係者、郷土史家、老人等から、バルガ人の現在の居住地・人口・生業・歴史・氏族構成・言語使用状況・固有の習俗・他集団との関係等を聞き取った。厳密なフォーマットに基づく調査ではなく、その場の状況に応じて話題を自由に展開したので、得られた情報は定型的ではない。また、関連する文字資料で、筆録・撮影等が可能なものがあれば、極力収集につとめた。以下、調査日程の概略を示しておく。

- 9月6日 東京→瀋陽。ブレンサイン氏と瀋陽で合流。
- 9月7日 瀋陽→鳳城。市民族宗教局のスタッフと打ち合わせ後、趙万興氏（史志辦公室主任で『鳳城市志』の主編者）の案内で、紅旗鎮包営子、藍旗鎮広勝村で聞き取りを行う。広勝村付近の蒙古営子にある「陶氏墓碑」を見学。
- 9月8日 午前：市中心に住む「包」姓の老人を訪問し、聞き取りを行う。市内の「秦家大院」（バルガ旗人？で、張作霖の幕僚だった秦華の旧邸）を見学。午後：鳳凰山の朝陽寺と紫陽観を見学。大堡鎮愛路村の「胡占白墓碑」（光緒9年立、バルガではなく蒙古八旗に関するもの）を見学。
- 9月9日 午前：市政府史志辦公室で趙万興氏と歓談。午後：鳳城→岫巖。県民族宗教局のスタッフと打ち合わせ。「満族博物館」見学。夕食時に2人の郷土史家（曲杲氏と寇徳峻氏）から聞き取りを行う。
- 9月10日 午前：市内の旧「巴爾虎胡同」、近郊の臥龍山の石廟と碑林を見学。岫巖城の旭升門の門額などがあった【写真1】。昼食時にふたたび寇徳峻氏から聞き取り



【写真1】岫巖城旭升門の門額

を行う。午後：岫巖→瀋陽。

9月11日 瀋陽→東京。

3. 調査で得られた情報

本章では、聞き取り調査と現地で収集した文字資料から得た情報を整理して提示し、若干の考察を加える。バルガ人の歴史・現況に関するものを主としたが、それとは直結しない事柄も、情報提供の意味である程度付載した。配列はほぼ調査の時系列順である。他の諸資料に照らして明らかに史実でないと思われる内容についても、とくに修正は加えていない。

3-1. 鳳城市

3-1-1. 調査記録

1) 紅旗鎮包營子村（市中心から南西へ約40 km）【写真2】

バルガ人ではない旧蒙古旗人の「包」姓が多いということで訪問したが、結局会うことはできなかった。村主任の肖木勝氏（55歳）によると、村の人口は450戸、1,700人で、うち満族1,000人、蒙古族50人。蒙古族は「包」姓のみで、文化大革命前に他へ移動した人が多く、今はほとんど残っていない。また、古くからの満族には「関」「李」「楊」「赫」の諸姓があるという。



【写真2】鳳城市紅旗鎮包營子村

2) 藍旗鎮広勝村（包營子から南西へ10 km 強）【写真3】



【写真3】鳳城市藍旗鎮広勝村

バルガ旗人の子孫が比較的多く住んでいるとのことで、鳳城の中でもっとも期待をかけていたところである。まず村長の叢産珠氏（48歳）に、村の人口構成等、基礎的なデータを説明してもらう。それによると、総人口は約400戸1,760人、うち満族60%、錫伯族10%で、蒙古族は「陶」姓が20戸、「敖」姓が8戸、「呉」姓が2戸ほどとのこと。なお、錫伯族には「程」「何」「呉」の各姓がある。

ついで近所に住む何人かの蒙古族の老人を呼び集めてもらった。まず陶文芳氏(72歳)から少し話を聞いたところで、日が暮れかけたので、先に「陶氏墓碑」を見学し、撮影・録文を行う。碑は陶氏一族の墓地の入口に立てられている。その後敖国富(68歳)・陶桂和(71歳)の両氏からも話を聞くことができた。

《聞き取り①》

- a) 陶文芳氏：自分たちがバルガだとは聞いたことがあるが、祖先がどこから来たか、よくわからない。十年前、他所から同姓の人が来て¹⁴、40人あまりが共同で近くの蒙古営子に「陶氏墓碑」を建てた【写真4】。家譜は南隣の東港市の龍王廟鎮にあると聞いている。
- b) 敖国富氏：バルガ人の祖先は、張家口から駱駝を引いてきた。そのときの牛泉〔佐領〕は安達里という人で、その後エルデニという人もいた¹⁵。「駱駝墳」と二つの大きな碑があったが、現存しない。「敖」姓は、最も多いときで20~30戸あったが、今は6戸。「敖」と「包」「呉」は、本来同じ姓で、別のものではない。「包」「呉」は、今はこの村にはいない。「敖」姓には敖土田という人が所蔵していた家譜がある。伝統的に仏教を信じていた。
- c) 陶桂和氏：自分たちの祖先は、内モンゴルから騎馬で来た。向こうで迫害され、逃げてきたのだという。ここへ来たとき、土地の割り当てを決めるために「跑馬占地」をやっ

実 紀 園 陵
溯我陶氏族(蒙古族) 始遷祖陶国渾氏原来兄弟五人 于清聖祖康熙三十一年奉赴詔令東來駐防鳳凰城巴爾 虎正黃旗佐領幕下世有勛功憶我先祖陶国渾單伝到茅 三世布魯勒後分三大支派繼而生殖日繁支派漸大人口 益多安居蒙古營子迄今已三百年現伝十有四世為了加 強三大支派的緊密團結達到慎終追遠的目的特立此碑 詳做嚮導以垂久遠
一 九 八 九 年 清 明
主 辦 立 碑 人 陶 文 芳 陶 英 云 陶 陶 桂 芳 及 全 體 族 衆



【写真4】 陶氏墓碑

た。その後は移動していない。曾祖父はモンゴル語と満洲語ができたが、祖父はどちらもできなかった。民族籍は一貫して蒙古族で、変えたことはない。紙に建物を書いたものを祭る風習があるが、これは満族と共通している。

3) 市内・包粹瑤氏宅

前日、包営子での調査がほとんど収穫なく終わったため、市内に住む包営子出身の包粹瑤氏(90歳)を訪ね、鳳城の蒙古旗人全般について話をうかがった。

《聞き取り②》

包粹瑤氏：もとは紅旗村包家営〔包営子〕に住んでいた。元来はボルジギン氏である。清皇帝とともに転戦し、戦功を建て、この地を守るために張家口のあたりから派遣された。そのとき、「包」姓だけでなく、他姓も一緒に来た。たとえば、蒙古営子の「陶」姓もそうである。バルガ人については、代々「ボルジギン=バルガ」と伝えている。「呉」姓は満洲人ではないか。もともと、包家営には「包」姓だけが住んでいた。現在、「包」姓は、近隣の黄旗〔黄旗堡〕・四家子(四家堡子)・林子溝(林家溝)にも住んでいる。「包」と「敖」は一家だという言い方があるが、通婚は差し支えない。「包」の中では、黄旗・紅旗の別があっても結婚してはいけない。祖父母はモンゴル語がよくできたが、父母は少しだけ。自分は“buda ide”しか言えない。満洲語はまったく使っていなかった。祖先の中に、正紅旗の領催として城に勤めていた人がいた。曾祖父のころは俸銀をもらっていた。むかしモンゴル人は漢人とは結婚しなかった。婚礼のとき、大車(馬車)の上にオンドルに敷く布(高粱の穂で編む)で幕を張り、娘を送った。娘を送ってきた女方の人たちが帰るときに、男方から豚の脚を贈った。これを「離娘肉」という。昔は牛や羊を自分たちで飼っており、好んで食べた。家の西側の中央に、黄色い布に描いた仏像がかけてあった。「喇嘛廟」という場所が、包営子の東3里ほどのところにあるが、廟自体は見たことがない¹⁶。小さな老爺廟は「呉家西溝」にあった。龍王廟は丹東市の境域〔龍王廟鎮〕にあった。自分たち以外に、近くにモンゴル人がいるとは聞いたことがない。包家営にも昔は碑文があった。バルガのいくつかの姓の中では、「包」がもっとも権威がある。父の包純和は鎮長で、1920年代には「第6区」の区長となり、「包純老爺」と呼ばれていた。後に農民会の会長となり、康徳4年に死去した¹⁷。自分は紅旗鎮で小学教師をしていた。家譜はあったが、偽滿時代に消失した。墓所は包家営にある。民族籍は一貫して蒙古族である。鳳城の有力な姓としては、「秦」「黄」「鮑」「劉」がある。「鮑」(中華民国外交部長の鮑文越、抗日英雄の鮑化南など)がモンゴル人かどうかはわからない。漢人かもしれない¹⁸。

4) 大堡鎮愛路村(市中心から北東へ約20 km)

大堡鎮は2003年まで「大堡蒙古族郷」であったところで、光緒年間に立てられた蒙古旗

人（バルガではない）の碑を見るために訪問した。2004年にブレンサイン氏が「胡爾佳氏石刻家譜」として紹介したもので、碑陽中央に大字で「皇清待贈胡姓太高祖占白之墓」とあり、胡氏の歴代の名と簡単な事績が記されている。本文は漢文だが、末尾に“Badarangga doro uyuci aniya nadan biya tofohon de mukūn da hingci? / fuming / canliyan?”（光緒9〔1883〕年7月15日、族長 Hingci? / Fuming / Canliyan?）と、日付と撰者名が満文で刻されている¹⁹。碑陰には、右端に「鳳凰城正黃旗波力其吞佐領下陳蒙古姓胡三代名氏」とあり、以下歴代の人名が家譜式に刻されている。バルガ人に関わるものではないので、録文は省略する。なお、碑文を調査中、たまたま近くを通りかかった胡榮遠氏（65歳）から、若干の話を聞くことができた。

《聞き取り③》

胡榮遠氏：愛路村はもと「胡家堡」といった。「胡」姓が100戸ほどある。付近のモンゴル人の姓には「代」「戴?」「鄂」「康」「呉」「石」「陳」がある。「胡」姓は正黃旗に属し、胡什五という人物が秀才になったことがある。墓碑に書いてある占白は盛京で死去した。

5) 『呉西勒氏譜書』について

上述のように、この資料はブレンサイン氏が2004年に調査されたもので、筆者は実見していないが、バルガ人に関わるものなので、概略を紹介する。ブレンサイン氏が調査したのも複写本であるため、原書の体裁は明確でないが、排印本（線装?）である。呉西勒氏九世の春融等が編集刊行したもので、冒頭に春融をはじめ発起人等十数名の顔写真がある。次に①呉西勒氏譜書序（民国18年秋）、②呉西勒譜序（民国19年8月）、③呉西勒氏譜書例言（民国19年秋）、④鳳城呉氏譜書序（民国19年5月）、⑤呉敖族譜全書略銘（民国19年）、⑥恭録蒙古営子祖塋碑文（乾隆58年、2則）があり、その後には呉西勒氏の四支系の人名が、系図と世代別表の二つの形式で列記されている。表には男子の名の隣に妻の氏を記す欄もあり、また身分（領催・兵等）その他が注記されている場合もある。呉西勒氏の由来に関しては、春融の筆になる①に大略次のような記事が見られる。

呉西勒氏はまた敖奇勒とも訳し、巴爾虎蒙古である。ジュンガルの投降勧告を拒否し、男婦万余人が南下して張家口外で遊牧していた。康熙31年、清朝の決定によって1,200名が盛京に移住し、10ニルに編成されて、うち3ニルは盛京に、7ニルは遼陽・鳳凰等の7城に駐防した。そのとき、始遷祖の安達力は鳳凰城の牛泉章京〔佐領〕に任じられ、人々を率い、父烏本代の靈柩を駱駝に載せてきたが、城南の臥虎山麓で駱駝が動かなくなったので、そこを吉地として埋葬した。そして付近の土地を開拓し（原注：現在の六区で、そこには今でも蒙古営子の名がある）、次第に繁栄して11世になる。呉西勒氏の始遷祖は安達力、班底、包爾吉良、阿爾哈の4人であるが、互いの統柄は

不明である。

前半のバルガ全体の由来に関する部分は、明らかに民国『鳳城県志』と共通する内容だが、後半は独自の情報である。系図と表の詳細な内容は省略に従うが、興味深いのは、おむね1世から3世までは「白思乎郎」「巴雅力」「三音查格」「撮克土」「布顔土」等、モンゴル名が多いのに対して、4世以降になると「伊力布」「烏力滾太」「格図青」「倭什琿」「烏雲太」「付勒恒厄」「阿克墩」といった満洲名が目立ち、ほぼ7世以降は漢名（同輩行の者が名の一字を共有する）が主となることである。

3-1-2. 考察

今回取材を行うことができたバルガ人は、上記のとおり、広勝村・蒙古營子一帯に住む陶・敖（呉）の両姓であるが、陶姓（陶国渾）については、康熙31（1692）年に嫩江一帯から移動してきた人々の後裔であることは、ほぼ確実である。上述のように、「黒龍江將軍衙門檔案」は、康熙29（1690）年に外モンゴルから嫩江一帯に流入したバルガ人の中に、Togonkon という氏族がいたことを伝える。これが「陶国渾」に当たると見て誤りないであろう。ただし、①a・①cの陶文芳氏・陶桂和氏自身は、祖先について確たる認識をもっておらず、「陶氏墓碑」建立の際に得た情報が基になっているようである。従って、陶姓の由来に関する伝承が元来どのような形で残っていたかについては、立碑の主導者と思われる陶白英氏の周辺を探ってみる必要があるであろう。

敖（呉）姓については、事情はやや複雑である。民国『鳳城県志』および『呉西勒氏譜書』によれば、敖（呉）姓の原名は呉西勒（または敖奇勒）であるが、「黒龍江將軍衙門檔案」には該当する氏族名を見出せない²⁰。また、『譜書』は、始遷祖の安達里が初代佐領であったと記す。一方、檔案には康熙30（1691）年に黒龍江で編成された20ニルの佐領名が列挙されているが、少なくともその中には安達里に相当する名はない。とはいえ、敖（呉）姓がバルガ人とは無関係と見ることに無理がある。『鳳城県志』と『譜書』の記載はやはり無視できないし、敖（呉）姓と陶姓の本拠がともに藍旗鎮一帯と見られることは、両者が同一のニルに属していた可能性を示唆する。もちろん、檔案にバルガの氏族名が漏れなく記録されているとも限らない。確証は得られないものの、敖（呉）姓もバルガ=ニルの構成員であったと見るのが穏当であろう²¹。

①bの敖国富氏は、祖先は張家口方面から来たと述べているが、このことは上記のように『鳳城県志』と『呉西勒氏譜書』にも見える。安達里という名や「駱駝墳」等も『譜書』と共通するので、おそらく家譜（『呉西勒氏譜書』そのものであるかどうかは不明）から得た情報であろう。なお、張家口から来たという伝承に関しては、②の包粹瑤氏が同じことを述べ、陶姓等も一緒に来たとしていることが注目される。包姓がボルジギン氏族だとすれば、バルガ人ではあり得ないが、バルガとともに移住した人々の子孫なのか、バルガ

=ニル以外の蒙古旗人に由来するのか、現時点では確定しがたい。いずれにせよ、「呉」(敖)と「包」が同族との認識は、おそらく二次的なものであろう²²。また、張家口から来たというのは、少なくともバルガ人については、ある時点で紛れ込んだ不正確な伝承が、『鳳城県志』と『譜書』への採録によって固定化され、広く流布するに至ったものと考えてよい。

生活文化の面について見ると、インフォーマントの方々が直接記憶している範囲では、バルガ人固有の伝統文化らしきものはほとんど認められない。仏教を信じていたと言(①bの敖氏)もあるが、どのような仏教であったのか、具体的な情報は得られなかった。ただ、言語に関しては、①cの陶桂和氏が、曾祖父の代までモンゴル語と満洲語を使っていたと語っていることが注目される。②の包粹瑤氏は、祖父の代まではモンゴル語がよくできたとしているが、両氏の年齢差を考えれば、ほぼ同時期に当たるであろう。これらの証言から、鳳城一帯の言語環境が激変した時期を推定することができそうである。総じて、包氏からの聞き取りには、往時の伝統文化に関するより具体的な情報が含まれているが、年齢から来るものなのか、居住地や八旗組織中における立場の違いによるのか、さらに検討する必要がある。

3-2. 岫巖満族自治県

3-2-1. 調査記録

1) 県中心のレストランにて

県民族宗教局長の李継凱氏を通じて、二人の郷土史家を紹介してもらい、夕食を共にしながら話を聞いた。曲杲氏(75歳、漢族)は元地方志辦公室副主任で、『岫巖史話』(岫巖満族自治地方志辦公室、1991年)等の著者。寇徳峻氏(74歳)はバルガ人で元農業銀行勤務、1991年に退職後、バルガ人の歴史に関する資料を鋭意収集し、1996年に『翁闊特氏新譜』、『燕窩溝寇姓支系世譜』を著し、2002年には『岫巖巴爾虎族：寇氏家族定居岫巖紀実』を出版した。

《聞き取り④》

a) 曲杲氏：県城に「巴爾虎衙門」(佐領衙署)があり、そこは「巴爾虎胡同」と呼ばれていた【写真5】。現在の映画館の裏で、建物は民国期まであり、地名は解放数年後まで残っていた。城守尉衙門は現在の賓館の場所にあった。民人を管理する岫巖州の衙門は現在の県政府、巡検司衙門は現在の法院(公安局)の場所。これらを合わせて「9旗3衙門」と呼んでいた。旗人と民人が訴訟で争う場合、城守尉衙門が管轄し、民人は跪き、旗人は立って訴訟した。兵は城の周辺に分散して住んでいて、秋と春に「習箭庁」(旧客運站の場所)に集合して訓練した。今でも老人たちは自分がどの旗の所属であったかを知っている。紅旗は東方の紅旗営子のあたり、白旗は南方の八家子・新甸のあたり、藍旗は県城の

すぐ南の藍旗堡子あたりにいた。バルガ兵は主に南方の現莊河市の境域に、海岸にかけて住んでいた。「寇」姓が住んでいたのは燕窩村〔=燕窩溝、前営鎮内〕である。満族の家譜（漢文）を40～50点収集した。そのうち10以上は比較的整ったもので、これらを『九旗家譜』として整理・出版する計画がある。「秦」家は、朝陽に今でも子孫がいるが、バルガ人ではないのでは？「包」姓も朝陽にいるが、バルガではない。



【写真5】岫巖満族自治県・旧巴爾虎胡同

b) 寇徳峻氏：岫巖一帯のバルガ人には、「寇」「白」「石」姓がある。「寇」姓はもともとバイカル湖あたりにいた「翁闊特」氏族である。最近、新たに譜書を作った。「白」姓はもとは Bayaha である。「石」姓は、もともとバルガ人かどうか分からないが、本人たちがいうので譜書に採り入れた。バルガ人は、ガルダンの息子から投降を勧告されたが、拒絶して移動してきた。来た当時は、官員は皇城の〔現在の〕影劇院胡同に、一般人は雅河沿いの寇家堡と、莊河市の巴爾虎営子あたりに牧地を構えていた。到着したのは康熙31年9月23日で、このことは、金州にある「赫」氏の碑文から確かめられる。モンゴル語は、父母・祖父母の代でもできなかった。

2) ふたたび県中心のレストランにて

前日の寇徳峻氏からの聞き取りが、時間の関係で不十分に終わったので、翌日あらためて同氏を招き、話を聞いた。

《聞き取り⑤》

寇徳峻氏：バルガ人がこちらへ来てから牧畜を営んでいたことについて、記録は残っていないが、沿海地区で放牧していたのではないか。民国『岫巖県志』によれば、蒙古八旗は〔壮丁〕100名が1佐領で、甲兵は55名だった。昔の寇家堡（寇家溝）は、後に燕窩溝と名前が変わった。満洲八旗は8個佐領あったが、初め防御で、後に佐領になったもの。バルガ人以外のモンゴル人としては、「何」姓、「李」姓があるが、これらは満洲八旗に隷属していたのではないか。岫巖にはラマはおらず、ラマ廟もない。自分の父親は、フルンボイル湖の方から来たモンゴルだと言っていた。1951年に民族籍を満族とした。そのころは、自分がバルガであることがわからなかった。1964年になって自分がバルガ人であることを知ったが、それは、光緒17年に將軍になった寇某に関する資料の中に、バルガについての記載を発見したからである。1986年から家譜の整理を始め、黒龍江まで行って譜書を写し

てきた。嘉慶17年に修譜を始めた家譜(原序あり)がある。康熙10年に作った譜書もある。また、大連の寇某も、資料を集めて譜書を作った。山東から来た漢人の「寇」姓にもある。バルガ人と満族との通婚はあった。

3) 『翁闊特氏新譜』について【写真6】

寇徳峻氏等が10年の歳月をかけてまとめあげた翁闊特(寇)氏の家譜集成。上の聞き取り記録にも見える、嘉慶年間に書かれたと推定される序をもつ『翁闊特氏譜書』をはじめ、清代と民国期に編まれたいくつかの譜書と、徳峻氏等による調査が基礎となっている。まず『翁闊特氏譜書』の原序(撰者不詳)が全文転載されているが、それによれば、バルガ人はガルダンを避けて黒龍江に入り、康熙31年に岫巖等の城に駐札して以来百二十余年になるといふ。次に「巴爾虎人之源流」等の概説的記事があり、ついで「寇姓歴代人物簡略」として、官職等についた著名人の名が列記されている。その後、莊河県高嶺郷曲木房・莊河県徐嶺郷四家子・宮窪村東四家子・莊河県高嶺郷来宝溝・莊河県塔嶺郷東瓜川・岫巖県燕窩溝・莊河県高嶺郷松樹咀・岫巖鎮寇家園子・莊河県塔嶺郷旋城・莊河県塔嶺郷団山等の各支系の詳細な系図がある。記録されているのは大体1世～11世だが、鳳城の『吳西

勒氏譜書』とほぼ同様に、1～3世はモンゴル名、4～6世は満洲名が目立ち、7世以降になると漢名がほとんどを占める。その後、「巴爾虎蒙古翁闊特氏四家子支系譜書原序」と「歪頭落子寿星山始祖哲雷墓碑文」(宣統2年)が転載されており、さらに「蒙古族族源」、「巴爾虎蒙古簡史」等の概説的記事が続く²³。末尾近くには、光緒17年に郷試に及第した翁闊特氏の文光なる人物の硃卷の譜系部分(複写)が載せられている。



【写真6】翁闊特氏新譜(1997年再版)

4) 『岫巖巴爾虎族』について

本書は、岫巖のバルガ人に関する最も充実した文献とあってよい。200頁に近い分量なので、ごく簡略にポイントのみを紹介する。全書は大きく二つの部分からなり、主篇「巴爾虎旗」は、バルガ人全般および岫巖のバルガ人の歴史・文化概説で、6章からなる。バルガ人全般に関する部分は、おおむねよく知られた材料に基づく叙述で、岫巖関係の部分は、大筋において寇氏自身から聞き取った内容と一致する。全体を通じて、上の『翁闊特氏新譜』と共通する記事も多い。岫巖への移住については、康熙31年に「張家口外」から来たものとし、典拠として『八旗源流』(瀛雲萍著、大連出版社、1991)を挙げる。また、

盛京一帯に移住したバルガ人の人口について、聞き取りにも登場する金州赫姓の碑文に「男女共五千余口、壮丁1,273名」とあること、『巴爾虎本源考』なる写本に洪俄爾代青の一族に関する記載があることを紹介しているが、この情報は『思益堂日札』『巴爾虎事輯』と共通し、同系統の情報源に基づくと推定される。バルガ人の文化と生活習俗にも1章が充てられているが、岫巖のバルガ人に特化した具体的な記述は少ない。「副篇」は、『翁闕特氏新譜』の摘録と、『燕窩溝寇姓支系世譜』全文の転載、および「筆者父母生平」である。

3-2-2. 考察

翁闕特（寇）氏が「黒龍江將軍衙門檔案」に見える Ongkot であることは疑いない。外モンゴルから嫩江一帯に流入したバルガ人のうちでも、Ongkot 姓は相当な大勢力で、1691年に20ニルが編成された際には、その中の9ニルを占めた。残念ながら、檔案中に見える人名と系譜情報とを直接結びつけることはできないが、岫巖のバルガ＝ニルも、この人々に起源すると推察される。

今回の調査で、岫巖のバルガ人に関してある程度まとまった情報が得られたのは、何といても寇徳峻氏等による資料の発掘・整理に負うところが大きい。⑤で氏自身が、1950年代までは自分がバルガ人であるとは知らなかったと語っていること、民国『岫巖県志』にバルガ人に関する記載がほとんど見られないことからすれば、バルガ人としての強固なグループ・アイデンティティが清代から連綿と受けつがれてきたわけではあるまい。ただ、翁闕特（寇）氏の場合、清朝後半期から満洲国期にかけて編纂された数種の譜書が残っていたことが、系譜情報の復元・整理に寄与したといえる。そして、鳳城では民国『鳳城県志』や『吳西勒氏譜書』がバルガ人の歴史を固定化して後世に伝える役割を果たしたように、岫巖では、いままさにバルガ人の歴史が再発見され、今後に大きな影響を与えるであろう、あらたなオーソリティが作られている最中だといえる。

『翁闕特氏新譜』所載の諸支系の分布と④ a 曲杲氏の話を総合すると、岫巖駐防所属のバルガや人の生活空間は県城の西南方に広がり、とりわけ現在の莊河市の境域が中心だったようである。県城には官員等だけがいて、一般の人々は郊外に分散するという居住形態は、鳳城とも共通し、東北駐防八旗のスタンダードなありかたを示していると見てよい。

生活文化については、鳳城の場合と同様、バルガ人固有の伝統的文化要素に関する情報は、今回ほとんど得られなかった。モンゴル語・満洲語の日常的な使用も、寇徳峻氏による限り、鳳城とほぼ同時期か、あるいはさらに早く廃れたようである。1-4で触れたように、民官の設置時期等から見れば、岫巖における民人の増加は鳳城に先行したと推定されるが、そのことと言語環境の変化との相関について、さらに検討が必要と思われる。

おわりに

今回の調査を通じて明らかにし得たこと、残された課題をあらためて整理してみたい。

まず、バルガ人固有の生活文化や社会習俗といったものは、現在および近い過去においては、その形跡をほとんど認めることができない。すでに19世紀前半には、バルガの人口が増えず、ニルの馬甲(兵)のポストが他の蒙古・満洲旗人に侵蝕されていたと伝えられること、民国『岫巖県志』や『莊河県志』にバルガ人に関する記載がほとんど見られないこと等を考え合わせれば、実体的なエスニック=グループとしてのバルガ人は、ほぼ清末までに消滅していたと見てよいだろう。モンゴル語や満洲語の使用が、現在生きている老人の1~2世代前にはすでに廃れていたと見られることも、そのことを傍証する。『呉西勒氏譜書』や『翁闕特氏新譜』に見える歴代の人名からすれば、この間のバルガ人の社会・文化変容のプロセスとして、まず満洲化、ついで漢化という流れを想定できそうであるが、具体的様相を明らかにするには、現時点では材料があまりに不足している。

しかし一方、バルガ人のグループ・アイデンティティは、系譜情報の整理や歴史の掘り起こしを通じて、ある程度維持され、再確認されてきた。鳳城においては、民国期の『呉西勒氏譜書』がそうした営為の典型であるが、「陶氏墓碑」から見れば、系譜情報の再確認は近年ふたたび活発化しているようである。岫巖では、寇徳峻氏等によって同種の活動がより積極的・系統的に行われ、いままさに歴史の再発見が進みつつある。とくに系譜情報の復元という面では、その寄与は絶大といえよう。ただし、こうした営みは、ある意味では両刃の剣である。たとえば、バルガ人は張家口一帯から来たという伝承を考えてみよう。この伝承の起源がどこにあるのか、はっきりとは確定できないが、民国『鳳城県志』がその流布に一役買っていることは疑いない。嘉慶(推定)『翁闕特氏譜書』原序には、「巴爾虎率衆至黒龍江、因駐筭於岫巖城、蓋即此時也」とあるのみで、張家口云々の記述はないので、岫巖のバルガ人は、おそらく元来はこの伝承をもっていなかったと考えられる。しかし、近年における歴史の再発見を通じて、この伝承は岫巖のバルガ人の歴史中に取り込まれた。おそらくこのまま後世に伝えられていくであろう。歴史が虚と実をないまぜにしながら織り上げられていくものであることは、時代・場所を問わず同じであろうが、その過程をいわば脇から眺めることができたのは、いささか逆説的ながら、今回の調査の一つの収穫であった。

なお、鳳城でも岫巖でも、バルガ人を含む旗人たちが駐防拠点の城内に集住していたわけではなく、大部分は郊外の村屯に住んでいたこと、その際、大体ニルごとにまとまっていたらしいことが、調査を通じて浮かび上がってきた。これは、同じ2005年夏に黒龍江省のチチハル一帯で行った調査で得た知見とも一致しており、東北における駐防八旗のありようを考える上で、一つのヒントとなるであろう。

いずれにせよ、現地調査と文献史料を組み合わせることによって、冒頭に掲げたように、バルガという集団の比較的長期にわたる社会変容の過程を再構成することが果たして可能かどうか、まだ先は見えない。方法論的にも課題は多いが、とにかく致命的なのは、絶対的な情報量の不足である。檔案をはじめとする文献史料のより網羅的な収集も当然必要で

あるが、鳳城・岫巖だけでは限界があることは明らかなので、今後はバルガ＝ニルの他の駐防地にも調査の網を広げ、比較検討を通じて局面を打開していきたいと考えている。

注

- 1) 鳳城の旧名。民国3（1914）年、従来の鳳凰県を、湖南に同名の県があることから鳳城県と改名した。
- 2) 拙稿「新バルガ八旗の設立について——清朝の民族政策と八旗制をめぐる一考察——」『史学雑誌』102-3、1993年、45-79頁。同「ホーチン＝バルガ（陳巴爾虎）の起源と変遷」『社会科学討究』44-2、1999年、87-111頁。
- 3) 「黒龍江將軍衙門檔案」12-1691、23-28、康熙30年6月8日付理藩院宛咨文。Dalai jinong とは、チェチェン＝ハンであったショロイの第11子アナンダ（Ananda）であり、Honggor daicing は、ショロイの第4子ブンバの第2子である。
- 4) 「黒龍江將軍衙門檔案」6-1692、174-178、康熙31年8月6日付黒龍江將軍サプス發理藩院宛咨文。ただし、文書によって人数には若干の違いがある。また、先に編成した20ニルのうち、Cimcikit 姓の1ニルと、Uliyat 姓の者たちは移動させず、チチハル付近に留め置くことになったという。
- 5) 周寿昌（許逸民点校）『思益堂日札』中華書局、1987年、229-233頁。
- 6) 満文「硃批奏摺」733、雍正9年6月29日付黒龍江將軍ナストゥ（Nastu）奏。バルガ＝ニルに編入したと明言はされていないが、前後の文脈からして、そのように考えてよいであろう。
- 7) 原文は「世佐管領」とあるが、明らかに「世管佐領」の誤りと見られるので、訂正した。
- 8) ただし、バルガの世管佐領2員はこの一体化の対象外。
- 9) 安東・寛甸両県境内の数は含まれていないと思われる。
- 10) 趙万興主編『鳳城市志』方志出版社、1997年、255-256頁。
- 11) 同上、269-271頁。
- 12) 岫巖県志編輯部編『岫巖県志』遼寧大学出版社、1989年、132-137頁。なお、鳳城・岫巖のいずれも、人口に占める満族の比率が高いが、その理由として、清代に旗籍に属していた漢人系の人々の子孫が含まれている可能性や、近年の民族籍変更の影響等が考えられる。
- 13) ボルジギン・ブレンサイン「鳳城市（旧鳳城満族自治県）見聞記——民族自治、モンゴル人、満洲人、そして家譜——」『満族史研究』3、2004年、173-180頁。
- 14) 「陶氏墓碑」の「主辦立碑人」の筆頭に名前のある陶白英氏を指すと思われる。同氏は市北部の通遠堡に住んでいるという。
- 15) 「安達里」は『呉西勒氏譜書』に始遷祖・初代佐領として登場する人物で、エルデニとはその次子で第二代佐領の「額爾堆」を指すと思われる。ブレンサイン氏の調査した『呉西勒氏譜書』には、第十世として「国富」の名が後から書き込まれているが、これが敖国富氏を指すと推察される（未確認）。
- 16) 趙万興氏によれば、「喇嘛廟」は現在の四家営子（四家堡子）のあたりで、廟の建物が1949年以前は残っていたという。
- 17) この人物については、民国『鳳城県志』第3巻「民治志 保甲」に略伝が見える。それによれ

- ば、同人はもと「巴爾虎領催」であったという。
- 18) 趙万興氏によれば、「秦」はバルガ人かもしれないが、確実ではない。鮑文越は元来朝鮮人で、「黄」「劉」は漢軍だという。
- 19) 撰者名については、碑陰に漢字で「成恵／恒祺？ 付明／成連」とあり、碑陽の満文は後の3人に当たると思われる。
- 20) 檔案に見える氏族名の中では、Odor がやや近いが、他に傍証がない限り、ただちに呉西勒（敖奇勒）に当てることには無理があろう。
- 21) ただし、1-3で述べたように、雍正9（1731）年には、「ウリヤンハイ」人が各地のバルガ=ニルに編入されている。こうした二次的に加わった民族成分も考慮の対象としなければならないだろう。
- 22) 包粹瑤氏が両姓の通婚は差し支えないと述べていることも、この推定を補強する。なお、両者の関係を検討するにあたっては、1-3で引用した「巴爾虎事輯」に見えるような、19世紀にはバルガ=ニルが他の蒙古・満洲旗人に侵蝕されていたという状況も、一つの要素として考慮しなくてはなるまい。
- 23) 「巴爾虎蒙古翁闊特氏四家子支系譜書原序」以下は、寇徳峻氏とは別の方が編纂したものである。

(YANAGISAWA Akira)